特集

鬼

――一切衆生と仏道を成ぜん

鬼は我々が幼い頃から知る
とても身近な想像上の存在だ。
仏教でも数々の鬼神、餓鬼など、
「鬼」のつく存在が伝えられる。
鬼とは何か。
鬼はどこから来たのか。

監修／德野崇行（駒澤大学仏教学部仏教学科准教授）

『地獄草紙』（部分）
平安時代～鎌倉時代（12世紀）、一巻、紙本著色、縦 26.5×横 454.7cm、
奈良国立博物館蔵、国宝、画像提供：奈良国立博物館

特集関連企画

描かれた「鬼」

監修　山下裕二（美術史家・明治学院大学文学部教授）

古くは人々の想像力を掻き立て、怖がらせてきた鬼。しかし時代が下ると、どこかおかしみのある姿で描かれ、土産物にさえなり、人々を楽しませる存在となった。江戸～明治時代のユニークな絵画を見てみたい。

白隠慧鶴筆『鍾馗鬼味噌』（海禅寺蔵）

キャラクター化とユーモア

日本の絵画では、鬼はどのようなポジションにあったのだろう。少なくとも、仏や菩薩、竜のようにはメインの画題とならなかったようだ。だが、鬼が描かれている絵はある。例えば、鍾馗（しょうき）に追い払われる疫鬼や地獄の獄卒として――。

鍾馗は中国起源の神で、疫病神を追い払うとされる。今もその魔除けの力にあやかり、端午の節句に鍾馗の人形を飾るなどする。鍾馗と鬼が描かれた絵は多いが、臨済宗中興の祖・白隠慧鶴（はくいんえかく）禅師（一六八五～一七六八）の『鍾馗鬼味噌（おにみそ）』は際立ってユニークな作品だ。

鍾馗が、すりこぎで鬼をすり潰している。賛は「鬼みそばかりはむごとふてすりにくひものじや」（鬼味噌ばかりは、むごたらしくてすりにくいものだ）。すり鉢を手で押さえているのは鍾馗の子どもで、「鍾馗大臣のむすこ也／とゝさ、鬼みそを、ちとなめて見度（みた）ひ」と書かれている。父さんちょっと舐めさせてなどと頼んでいるが、すりこぎの先の赤い色は鬼の血だろうか……。そもそもこの四匹の鬼は何を意味するのだろう。

「心の中の鬼や煩悩を象徴するなど色々な見方ができそうですね。また、この鬼味噌を舐めてみるとはどういうことで、どんな味がするのでしょう。白隠はこの絵で何を説こうとしたのか。興味深い作品です」と山下教授はいう。

「またこの絵を見ると、白隠はやはりキャラクター化の名手だったことがわかりますね。しかも江戸時代らしい、ちょっとかわいい方向性のキャラクター化。人々はこの絵を見ながら、ユーモアに満ちた白隠の説法を楽しく聞いたのかもしれません。またもう一つ、この絵はとても手の込んだ作品に見えるかもしれませんが、筆遣いは猛烈なスピード感があります。白隠は描くのがとにかく早いのですが、この絵も何日もかけてはいないはずです。白隠の高度な技術が見て取れます」（山下教授）

白隠慧鶴筆『地獄極楽変相図』（清梵寺蔵）

地獄と白隠禅師の原体験

『地獄極楽変相図（へんそうず）』も鬼の姿のあるユーモラスな作品だ。いくつもの地獄の様子を描き、こういうことをすればここへ堕ちる、と教えたものだ。この絵を所蔵する清梵寺（せいぼんじ）（沼津市）は地蔵尊で著名なお寺であり、白隠のいた松蔭寺（しょういんじ）のすぐ近くにある。白隠は清梵寺へ行って人々に絵解きをしたのであろう。しかし、何やら短冊形の空白が見えるが――。

「『世間メカケモチ』だけ書き込まれています。妾なんか持つのではないぞ、という戒めですが、それ以外は空白です。入れるつもりはあったのではないかと思うのですが、謎めいていますね」（山下教授）

ところで、白隠には「南無」で始まる「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」などの一行書が多数あり、その中で最も多いのが「南無地獄大菩薩」（六例）である。地獄が菩薩で、それに帰依するとはどういうことか。山下教授はこう話す。

「南無地獄大菩薩の一行書は晩年、七〇代から八〇代にかけての作と思います。ほかの一行書に比べて一字一字の配置が整っているので、白隠にとっては心落ち着かせて書くべきものだったようです。白隠は一一歳の頃に説法を聞いて地獄の恐怖を知ったことが一因となって一五歳で出家します。『地獄極楽変相図』もユーモラスではありますが、白隠の原体験に結び付いたテーマです。南無地獄大菩薩とは、地獄も極楽も心に映じた表裏一体のものだというような、晩年の境地を示しているのかもしれません」

白隠慧鶴筆『鍾馗鬼味噌』
江戸時代、紙本著色、
縦 56.8× 横 47.5cm、
臨済宗妙心寺派平沙山海禅寺蔵（島根県）、画像提供：花園大学国際禅学研究所

詣 禅寺を訪ねる

凌雲山松巌寺

鬼女紅葉の伝説ゆかりのお寺

鬼の無い里、鬼無里。この地名の由来といわれる鬼女紅葉の伝説は、当地では、能や歌舞伎とは違う趣きで語り継がれてきたという。その内容、人々の紅葉への思いに触れる。

松巌寺本堂。明治36年（1903）再建。平成12年（2000）から続く「鬼女もみじ祭り」の主会場でもある。ちなみに当寺は江戸時代に「鬼立山」から「凌雲山」に改号された。甚大な長雨被害が背景だったが、村人がその害を旧山号が含む「鬼」の祟りと考えたためという話もある

所在地 ：長野県長野市鬼無里320
電　話 ：026-256-2061
アクセス：JR「長野」駅からバス約1時間「鬼無里営業所」下車
上信越道長野ICから約1時間

紅葉の持仏を祀る菩提寺

信州・鬼無里の松巌寺は、鬼女伝説を縁起に持つ。彼女の名は紅葉。都から流されて当地へ至り、後に戸隠山の鬼女となって平維茂に討たれた。これは昔水無瀬といった当地鬼無里の地名起源譚でもある。

鬼無里の人々は紅葉の亡骸を自分たちの村へ運び、埋葬し、彼女の持仏だった地蔵菩薩像を祀って鬼立山地蔵院を建て、紅葉の菩提寺としたという。それが元和元年（一六一五）に鬼立山松巌寺となり、明和四年（一七六七）に現山号となる。なぜ鬼無里の人々は、鬼として退治された紅葉をそこまで大切にし、弔ったのであろう。地蔵院の堂宇は山門手前、今は観音堂のある場所にあったそうだ。紅葉のお地蔵様は、今は本堂に安置され、境内には紅葉の墓（五輪塔）や、彼女の家来たちのものとされる二〇基の五輪塔もある。

松巌寺の清水泰憲住職によると、鬼無里では、紅葉を「様」や「さん」付けで呼ぶ。「当地で語り継がれている紅葉は、まず第一に地域の文化・生活の向上に貢献した慈恵の人であり、その伝説は悲恋の物語なのです」と清水住職は語る。

1：紅葉の持仏と伝わる地蔵菩薩像と位牌　2：紅葉の墓とされる五輪塔　3：紅葉の家来たちの墓。しかし1000年以上前のものとは考えにくく、山中に散在した中世の木地師たちの墓という説もある

10年ほど前につくられ定着している紅葉のキャラクター。表は人、裏は鬼

紅葉伝説の二つの系統

能、絵巻、浄瑠璃に歌舞伎と、紅葉伝説を題材にした話は数多いが、筋は二系統に大別できる。一つは観世信光（一四三五または一四五〇～一五一六）の能『紅葉狩』の流れで、筋書きは次のようなものだ。

戸隠山で維茂が鹿狩りをしていると、高貴な女性たちが紅葉狩りの宴を催しているのに出合う。維茂は不審に思うが、誘われてつい酔い伏す。すると夢に八幡神の使いが現れ、鬼神を退治するよう伝えて神剣を授ける。維茂が目を覚ますと、正体を現した鬼が襲来。維茂はこれを討つ――。

鬼無里に伝わる話は、これとは違う第二の系統である。

紅葉は会津で生まれ、呉葉と名づけられた。両親の伴笹丸と菊世は、第六天の魔王に祈って呉葉を授かったという。娘が成長し、一家は上京。呉葉は名を紅葉に改め、清和源氏の祖・源経基（?～九六一）に仕える。紅葉は経基の寵愛を受けて身ごもるが、妖術で御台所（正室）を病にする。しかし陰謀は露見し、戸隠へ配流。

信濃に入った紅葉は、水無瀬に至る。御台所の嫉妬で流されたと語り、村人に読み書き、裁縫、算術、音楽などを教え、京のさまざまな文化を伝えた。また呪術や医薬の知識で仁術を行って敬われた。

鬼生山廣度寺

蝦夷の首領を鬼生明神として祀る

福島県郡山市の「鬼生田」の地にある廣度寺は、「鬼」と称された八～九世紀の英雄・大多鬼丸を古くから明神様として祀る。敵方・坂上田村麻呂にも称えられた彼の伝説と信仰を訪ねる。

坂上田村麻呂が創建

福島県・旧鬼生田村にある廣度寺の境内には「鬼生明神」を祀るお堂がある。中風除け、身体堅固の守護神として古来信仰を集めるこの明神様は、古代律令国家が蝦夷と呼んだ人々の首領・大多鬼丸である。

大多鬼丸は朝廷に服さず、征夷大将軍・坂上田村麻呂（七五八～八一一）と戦った英雄として知られる。いい伝えでは、今の岩手県一帯に勢力を持った阿弓流為（？～八〇二）討伐の過程で撃破された。しかし田村麻呂は、敵であった彼を称え、また、民衆を安堵させるために廣度寺を建立したと伝わっている。さらに人々はお堂を建て、大多鬼丸を鬼生明神として祀った。

廣度寺の開闢は、阿弓流為降伏後、大同年間（八〇六～八一〇）のことのようだ。曹洞宗となるのは室町時代、戦国期に入った文明年間（一四六九～一四八七）で、大本山總持寺三百十世（輪住）重屋清珍禅師を開山に迎えている。

鬼生明神のお堂「冨月堂」（ふげつどう）。平成23年（2011）に建て替えられた。「冨月」は、建て替えの発願者、故・鬼生田冨美子氏（廣照院瑞光英冨禅尼）の華道の雅号である

その後は室町時代半ば、平将門の末裔とされる平氏田村一族の鬼生田城主・鬼生田弾正顕常の発願で永正年間（一五〇四～一五二一）に寺格を確立。廣度寺七世心叟道存が中興開山とされる。ちなみに顕常は、伊達政宗の正室・愛姫の父・田村清顕（？～一五八六）の重臣で、鬼生田の地を治めるに当たって鬼生田を名乗った。

大多鬼丸の生い立ち

鬼生田という地名は、鬼の生まれた田んぼの意。鬼は大多鬼丸を指す。そして鬼生田には、彼ゆかりの場所がいくつもある。

所在地 ：福島県郡山市西田町鬼生田字前田119番地
電　話 ：024-972-2714
アクセス：JR「郡山」駅からタクシー約20分
東北自動車道「本宮IC」、磐越自動車道「郡山東IC」から約10分

大多鬼丸は、廣度寺近くの「地獄田」で母親が田植えをしている最中に生まれたとされる。地獄田という町字名はないが、地元の人々がその場所を伝えている。

また、急な出産だったので、湧水のあるすぐ近くの沢で産湯をつかい、そこに小屋を建ててしばらく過ごしたという。その場所は「沢小屋」と書いて「さわごや」とか「さごや」と呼ばれている。

また、大多鬼丸には、角の生えた鬼の子で七歳にして身長が五尺（約一五〇センチ）あったとか、巨石で遊んだとか、いかにも「鬼」らしい話もある。その石は「鬼石」といい、廣度寺を出てすぐのところにある橋の下あたりにあった。昭和三〇年代、その橋をつくる際に撤去されたが、別の鬼石もあり、近くの民家の敷地で社に安置されている。巨石ではないが、大人も持ち上げられそうにない大きさだ。

大多鬼丸は、やがて英傑と称されるような人物となる。そして南陸奥の広範囲、少なくとも今の郡山市から田村市の一帯を治める覇者となり、田村市と双葉郡にまたがる大滝根山に本拠を定めた。この山名は、もちろん彼の名に由来する。

大多鬼丸は人並外れて才知に富み、また武勇に優れたという。そんな彼を人々は鬼と考えて畏れ敬い、その出生地をも鬼生田と呼ぶようになったのだろう。